

國學院大學學術情報リポジトリ

歌唱共通教材簡易伴奏作成の試み：
実践的歌唱指導のために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 真琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001208

歌唱共通教材簡易伴奏作成の試み

— 実践的歌唱指導のために —

高山 真琴

Trial of Making of Music for Piano Accompaniment

— For Improvement of Singing Teaching —

Takayama Makoto

キーワード：歌唱指導 和声感 アナリーゼ 聴くこと ピアノ

はじめに

歌唱指導に用いる伴奏譜には様々な種類がある。指導用教材を見てみると、原典を児童の声域に合わせて移調したもの、編曲を委嘱された作曲家の創意あふれるもの、両手伴奏譜、右手に旋律、左手には1小節1音といった極限まで伴奏を簡素化したものなどがあり、教材として用いる場合の意図や教師の技量によって楽譜を選択できるようになっている。

平成23年度から施行される新小学校学習指導要領音楽では、指導上の配慮として「和音及び和声の指導については、合唱や合奏の活動を通して和音のもつ表情を感じ取ることができるようにすること」とし、和声感の獲得から波状する音楽的感性の醸成を期待する意図を明確に示している¹⁾。

和声は、旋律と呼応し音楽の土台と構成を司る重要な要素である。和声を感じるということは、音楽を構造的に捉える第一歩であり、また、和声進行の美しさを感じ取れるということは、調和のとれた響きを自らが作り出せることにもつながってくる。

本稿では、合奏や合唱といった発展的な表現活動に入る礎を作る小学校低学年の段階で、和声感の育成をも視野に入れた歌唱指導を行うために簡易伴奏譜を作成する場合の一作業方針を提示し、作成された伴奏譜を原典譜と共にアナリーゼしながら、歌唱指導を行う際の留意点を示す。また、音楽の授業におけるピアノの有用性についても併せて考察する。

I 簡易伴奏譜作成方針

1. 題材

「日のまる」(第1学年教材)と「夕やけこやけ」(第2学年教材)を扱う。日本人の生活や心情と深いかかわりあいを持ちながら、世代を超えて受け継がれてきた我が国の音楽文化といえる唱歌や童謡、我が国の伝統的な音楽感覚に根ざした音楽であるわらべうたや民謡、そして日本古謡の

数々は、教科音楽の歌唱共通教材として選定され、その取り扱いの充実を新学習指導要領では改善点として謳っている²⁾。上記2曲は歌唱共通教材であることと、異なった作曲手法により作られている点から、今回の簡易伴奏作成の題材として用いた。

2. 原典となる楽譜

「日のまる³⁾」は足羽章編集『日本童謡唱歌全集』、「夕やけこやけ⁴⁾」は長田暁二編集『日本叙情歌全集1』に掲載されているものを原典として用いる。尚、原典では「日のまる」は「日の丸の旗」、「夕やけこやけ」は「夕焼小焼」と曲名が表記されている。

3. 作成の視点

歌唱指導と共に和声感の育成が図れることを念頭に置く。

4. 作成の方法

楽曲の前奏と後奏を除く歌唱部分を、機能理論の視点を以て和声分析を行い、その分析された和声進行を基に、①低音部譜表に和音、高音部譜表に旋律を配した大譜表、②低音部譜表にバスの音、高音部譜表に旋律を配した大譜表、という2種類の楽譜を作成する。

5. 和音記号

和声分析した和音には和音記号を記すため、その表記法については次のように統一する。

(1) 音階固有和音

音階各音上にそれぞれの3度と5度上の音階の音を積み重ねた三和音を音階固有和音と言い、根音に当たる音階構成音の音度をローマ数字の大文字で表記することで表す。

譜例1

C: I II III IV V VI VII I

(2) 四和音

4つの構成音で出来ている和音を四和音と言い、和音記号の右下にアラビア数字の7を書いて表す。

譜例2

C: V V₇

(3) 転回形

和音の転回形は、転回指数を和音記号の右上にアラビア数字を用いて表す。

転回指数 1 … 和音の第三音をバスに置いた形

転回指数 2 … 和音の第五音をバスに置いた形

転回指数 3 … 和音の第七音をバスに置いた形

譜例 3

C: I I¹ I² V₇ V₇¹ V₇² V₇³

(4) 根音省略形

和音の根音省略形は、和音記号に斜線を書いて表す。

譜例 4

C: V₇² V₇³

(5) 借用和音

I 度を除く原調の音階固有和音をそれぞれ I 度と見る調から一時的に借用してきたもので、次のように表す。

譜例 5

C: II V₇ II IV₇ IV V₇ V

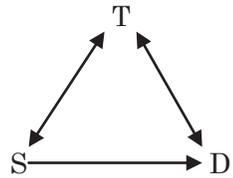
6. 機能理論の確認

本稿で和声分析に用いる機能理論は、音階の各音は、「その調の内部で各音に割り当てられた機能（固有の働き）を果たしつつ、相互に関連し合い、結びついて調を確定する」という考えを基に展開される和声の理論⁵⁾である。その音階各音上にできる音階固有和音は、図1⁶⁾に示す機能に分類され、図2に示す各機能の運動の方向性の法則、すなわち、主音度機能（T）と属音度機能（D）、主音度機能（T）と下屬音度機能（S）は可逆的關係にあり、下屬音度機能（S）と属音度機能（D）は不可逆的關係にあるという和声進行の原則⁷⁾に則り、全体的に關係し合っている、というもので、音楽を構造的に理解する場合のひとつの視点となるものである。

図1

	名称 〔日〕 〔独〕	略号	主要和音	代理機能音	
				第一次	第二次
機能	主音度機能 Tonika	T	I	VI	III
	属音度機能 Dominante	D	V	VII	III
	下屬音度機能 Subdominante	S	IV	II	VI

図2



II 伴奏譜の解説及び歌唱指導における留意点

1. 日のまる

原典譜（譜例6）

し ろ じ に あ か く ひ の ま る そ め て

F: I V I I¹ V I I I¹ I IV IV I I¹

あ あ う つ く し い に ほ ん の は た は

IV IV I¹ V I I I V¹ V I I¹ II¹ V I

簡易伴奏①（譜例7）

F: I V¹ I V¹ I I IV² I

IV² I I V¹ V¹ I V¹ I

簡易伴奏②（譜例8）

F: I V I V I I¹ IV I¹

IV I¹ I V V¹ I II¹ V I

解説

原典譜（譜例6）を見ると、第1小節から第16小節まで、全ての音が和声音で作られていることが分かる。左手のバスの上にはほぼ密集に近い形で右手の和音が置かれ、和音の最高音をたどると旋律線になるという作りである。すでにこの原典自体が明瞭な和声感を醸し出しているが、その四分音符の動きが楽曲に躍動感を与えている第3、第6、第7、第8、第13、第14小節のバスのように、1小節のなかで同一和音が転回する場合には、簡易伴奏①（譜例7）のように1小節を1和音で括ってみると、和声の動きがより明瞭に感じ取れるようになる。

右手に旋律、左手に和音というもっとも典型的な簡易伴奏①は、児童が教師の範奏を聴きながら旋律を把握するには適した伴奏である。左手の和音を美しく響かせながら、一語一語を明瞭に発音するようなタッチで右手を弾く。この場合、特に留意すべき点は右手の同音連打の扱いである。冒頭4小節を例にとると、ともすれば、タッター|タッター|タッター|ター |とアーティキュレーションがついているかのように弾かれがちであるが、その不必要な区切りが児童の歌唱に反映されぬよう、同じ音を2度弾く場合には、最初の音を十分押さえて2度目の音を素早く押さえ直すように弾き、音のつながりが滑らかになるよう留意する。教師の出した音はそのまま児童の声となって反復されるので、「しろじにあかく／ひのまるそめて／ああうつくしい／にほんのはたは」というように、歌詞の区切りとフレージングとを教師は範唱の際に一致させ、第4、第8、第12、第16小節の各2拍目にある四分休符でプレスをすることを児童に示し、歌詞のつながりと音のつながりが一致していることを児童が感じ取れるよう導いていく。また、「ああうつくしい」の「ああ」という感嘆詞は、この曲の中で一番高い2点二の音で歌われる。気持ちの高揚が歌詞と音とで表されていることを児童に示すことで、児童は歌詞と音楽との融合性に気づき、どのような思いをもって歌うか、という児童の自ら表現を工夫する意欲を教師は喚起することができる。左手の三和音は響きにやや厚みを感じるが、充実した和声音が音楽の土台としての安定感をもたらすことと、その動きによって楽曲の構成感を感じ取ることが出来ることを、十分児童に印象づけられるよう奏すべきである。

簡易伴奏譜②（譜例8）は、右手に旋律、左手に原典（譜例6）に記されているバスの音を各小節に一音ずつ配す、という二声構造の極めてシンプルな楽譜である。しかし、実際音にしてみると、左手の1音1音が十分に和声感を以て響いていることに気づく。音階各音がバスに置かれると、機能的和声感を発揮することを児童は聴覚を通して体験するのである。また、意識的にバスの音を聴きながら歌うことで、歌の音程を自ら調整したり、音としては響いていない和声音を頭の中で補完することも可能となってくる。

歌唱教材としてどの楽譜を選ぶかは、それによって児童は何を体験しうるか、という教師の予測と狙いが明確にあった上で決められるべきものである。そして、いずれの楽譜を選んだ場合も、教師は自らの音とそれに呼応する児童の声をよく聴き、調和の取れた美しい音楽を構築していくことを常に心掛けるべきである。

2. 夕やけこやけ

原典譜（譜例9）

ゆうやけ こやけで ひがく れて や まの おてらのかねがなる

C: I I I¹ V²I V⁷ I IV V I

おーてて つないで みなかえろ からすと いっしょにかえりましょ

IV I¹ IV V₇³ I I¹ II I IV I

簡易伴奏①（譜例10）

C: I I I V₇¹ I IV² V₇ I

IV² I V₇¹ I I II¹ V₇¹ I

簡易伴奏②（譜例11）

C: I I I¹ I V I IV V I

IV I¹ IV V I I¹ II¹ I² V I

解説

原典譜（譜例9）には、冒頭から4小節、4小節、8小節と進むにつれて、声部が4声、3声、2声と1声ずつ減少していくという構造上の特徴が見られる。第1小節から第4小節は、4声合わせると譜例9に示す和声進行が浮かび上がってくるが、左手はバスとテノール、右手はアルトとソプラノというように、多声構造を意識して滑らかに奏することが望ましい。特に冒頭2小節、保続的なバスの響きとその上に刻まれるテノールの八分音符の動きは、突かれた鐘の音とその響きの余韻のような趣を醸しだし、暮れゆく時の移ろいを音の中に写し取っているかのようである。第5小節から第8小節は、右手はソプラノ一声のみとなり、左手のバスとテノールは、二分音符の上に八分音符を刻みながら、1小節ずつ和声的に動いていく。第9小節から第16小節は、右手は続けてソプラノ一声で動く。左手は右手と呼応しながら、まずアルベルティバスで2小節進んだかと思うと、次の小節ではソプラノの声に合わせるように3度下でハーモナイズし、経過句を経た後、第13小節から第16小節まで、ソプラノと対話をするかのように対旋律的に動き、歌唱部分の終結を迎える。全体のテンポは四分音符が84と指示されており、音楽の流れは感じるものの速過ぎず、八分音符の動きが和声的に把握できる落ち着いたテンポが設定されている。

この原典の和声を基に作成した簡易伴奏①（譜例10）は、原典では八分音符単位で分析した和声を、拍の動きの中で、あるいは1小節を一括りにして捉え、1小節に1和音を置くという和声構造が明確に感じられる形になっている。左手の八分音符の刻みが音楽の流れを作っている原典とは異なる趣だが、左手1拍目の和音が音楽の流れを停滞させないように4小節をワンフレーズと捉え、曲想を醸し出す柔らかな音色で、前進性をもって和音伴奏をつなげて弾くことに留意したい。この左手の和音は、上行形の素速いアルペジオで弾くことも、アルベルティバスで弾くことも可能である。右手は、歌詞の各音節に付けられた音を、1音1音丁寧に鍵盤の底を押さえるタッチで弾き、歌詞の表す情感を音によっても表せるよう意識する。「ゆうやけこやけで ひがくれて／や（-）まのおてらの かねがなる／お（-）ててつないで みなかえろ／からすといっしょに かえりましょう」という八五調で繰り返される歌詞を音程をつけず詩として読んでみると、日本語ならではの韻律の並びを感じることができる。この歌詞の持つリズム感を受けた旋律は、歌う以上に語る意識をもって表されるべきであろう。この歌詞に歌われている情景を児童とともに確認しながら、歌のイメージを児童が持つことを、歌唱表現に進む前の大事なプロセスとして児童に経験させたい。

簡易伴奏②（譜例11）は、原典のバスの音を拾いつなげていったもので、曲の雰囲気も原典と類似したものとなっている。バスとソプラノとで最もシンプルに、それでいて和声感がしっかりと感じられるこの伴奏を用いることで、児童は、たった一つの音に和声感を感じ取れることを経験するのである。主音への求心力を以て、相互にのみならず全体的に関係し合う機能と声の世界を、児童は理論的に理解する以前に、音楽そのものによって感覚的に捉えていくのである。

Ⅲ 教科音楽におけるピアノの有用性

ピアノはその構造から、複数の音を同時に出せるという特性を持つ。この特性は、ギターやヴァイオリンといった多弦楽器にも見られるが、ピアノの場合はさらに音域が下2点いから5点ハマで、実に7オクターブ以上と広く、教師にとって、模範奏の提示や歌唱伴奏、音感教育といった音楽教育の様々な場で活用できる可能性を合わせ持つ楽器である。また、児童にとっても、鍵盤の位置から音高を明確に認識できる点、そして鍵盤を押すだけで決まったピッチの音が出せるという独自性から、視覚及び聴覚の両面から音を捉えることができる教育用楽器としての有用性は非常に高いと言える。

平成22年夏に全国60都道府県市で実施された平成23年度小学校教員採用試験では、実技試験として「音楽・図工」あるいは「音楽・体育」のいずれかを選択という3府県市も含めると、実に47道府県市が音楽の実技試験を実施している⁸⁾。その内容は、自ら鍵盤楽器を弾きながら歌唱教材を歌う弾き歌いが主流で、教員としての技能のひとつに鍵盤楽器演奏と歌唱の能力を求める傾向が強いことを伺わせる。そしてこのことは、教員となった暁には、自らが音楽の授業を行うにあたり、その技能の発揮を期待することをも意味するものと考えられる。本学部の基幹科目であるピアノ実技A（第1学年後期開講半期科目）を昨年度及び今年度履修した学生100名をピアノの習熟度に応じてグレード分けした結果、ピアノの初心者と見なされるグレードIの学生は29名、多少の経験がありバイエルピアノ教則本の前半から始められるであろうが、ひとりでの読譜は困難と思われるグレードIIの学生は25名であった。全履修学生のほぼ半数以上が大学に入学してから本格的にピアノを学び始めるという現実の先には、その4年後、教壇に立ち、児童とともに音楽するという現実が待ち受ける。ピアノを弾けることが教科指導の能力の全てではないとしても、ピアノという楽器の特性を知り、ピアノを使って行える教科指導の可能性を考えることは、児童と分かち合う音楽の場の拡大にもつながると考えられる。

昨今では、授業で歌唱指導を行う場合、ピアノを伴奏楽器として用いず、指導用教材をプレーヤーで再生し音源として使うこともできるようになった。確かに、傷のない演奏に合わせて児童は歌うことはできるが、果たしてそこに互いの声と伴奏の音を聴き合いながら音楽していく緊張感や魂の揺さぶりは存在するであろうか？プレーヤーから流れる音は児童の息使いを感じることはできない。教師の表す前奏にその音楽の有り様を感じながら、歌詞による言語表現とそれに付随する音楽の両者が醸し出す歌の世界を児童は感じつつ表現していく。教師の伴奏は、その世界に時に寄り添い、時にリードしながら児童と一体となり、応答的に音楽を作り上げていくべきであろう。

終わりに

今回作成を試みた伴奏譜は、和声構造を明示するための簡易譜という性格上、あまり困難を来すことなく演奏することが出来る。言うなれば、この楽譜を利用することで教師自身が余裕をもつ

て児童の声に耳を傾けることが出来るのである。自身の演奏のみに神経を集中することなく、その場に生じた全ての音を聴き、応答的に音楽を作り上げていくための一指導教材として、和声構造を意識した簡易伴奏譜の作成とその使用を提案するものである。また、本稿では和声分析の詳細な方法は示さなかったが、端的に言えば和声音と非和声音を判別することが和声分析の第一歩である。そして、楽譜に書かれている音から判断して選び出した音階固有和音も、音楽的に当てはまる可能性の和音が一つだけとは限らない。和声進行の原則に則って、主要和音以外の代理和音なども使いこなせるようになると、教師が児童に提示できる音楽の世界がさらに広がりを見せるであろう。

参考文献

- 1)『小学校学習指導要領解説音楽編』 文部科学省 2008 p.71
- 2)『小学校学習指導要領解説音楽編』 文部科学省 2008 p.72
- 3)『日本童謡唱歌全集』 ドレミ楽譜出版社 2008 第32刷 p.420-421
- 4)『日本叙情歌全集1』 ドレミ楽譜出版社 2002 第27刷 p.170-171
- 5)『新訂標準音楽事典』 音楽之友社 2008 新訂第2版第1刷 p.480
- 6)野尻(高山)真琴 『ベートーヴェン ピアノソナタ作品81a告別の作曲学的考察』
武蔵野音楽大学大学院修士論文 1993 p.7
- 7)萩原英彦 『和声法学習への方法試論-Kadenzの基礎およびその展開-』
武蔵野音楽大学研究紀要 第8集 1974 p.80
- 8)『教員養成セミナー』2010年9月号(雑誌)時事通信社 p.28-39

(たかやまこと・國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授)